

要介護4から3へ 家族の愛と笑いへの情熱で成し遂げた 奇跡の復活

高橋 敏

林家こん平師匠



「1、2、3、チャリーン」。
今年の8月、日本テレビ系「24時間テレビ 28 愛は地球を救う」内の「チャリティー笑点」に、11年ぶりに登場した林家こん平師匠。声を振り絞ってギャグを披露した姿に、胸を熱くした方も多かったのではないだろうか。2度の病いに倒れ、右半身マヒと声帯機能にダメージをうけ、1度は生死の境目を彷徨いながらも、生放送のテレビ、「という公の場に復帰し、人間の威力を見せた。しかし、それだけではない。毎月1回、都電荒川線内の車両で行なわれる「都電落語会」に出演している。実は、これがこん平師匠の原動力なのだ。

Profile Information

林家こん平の落語協会所属、同協会理事兼主任。現在松竹園、大友会所属。芸名「笑点」の大喜劇オンパレードとして第1回から出演、中絶もあったが、病に倒れる2009年9月まで連続35年レギュラーを務めた。

大家から3ノ輪までをカクゴトシと走る路面電車、都電荒川線。そんな車両を毎日1回借り切って行なわれているのが「都電落語会」だ。えんじ色と黒とでラッピングされたひとときを引く外観。車内には高座がしつらえられている。



日本落語協会所属の林家こん平の可成り、都電の荒川線に於いて行われる「都電落語会」。



「落語協会」の代表者として、人権問題に取り組む林家



「笑点」の「笑点」で、東京の落語界を代表する

この日、高座に上がるのは3歳年上の歌謡さんと其支那さんという、ふたりの断案。車内は20人ほどのお客さんで、早くから熱気はムンムンだ。と、そんな高座の傍らで笑顔をのぞかせているのが「笑点」でお馴染みの林家こん平さんだ。こん平さんは2004年に脳病である「多発性硬化症」を発症。その後脳脊髄によるアクシデントで生死を彷徨い、現在もリハビリ中だというのが、その笑顔から悲壮感はまったく感じられない。

出発の合図と共に電車が走り出すと、元気な女性の声が車内に響いた。「都電落語会」は、林家こん平がまさに息を吹き返す場所です。さあ、それでは盛大な拍手で父を迎えていただければ幸いです。」

「笑点」のレギュラーとしてお馴染みだった林家こん平さんが最初に倒れたのは、2004年8月、日本テレビ「24時間テレビ」に出演した直後のことだった。

「師匠の意識がもうろうとしていました。」お弟子さんから、そんな電話を受けた現さんが病院に駆けつける時、そこには別人のようなこん平さんが座っていたという。

「右半身が硬直して、声も出せない。緊急入院することになり、検査の結果、告げられたのが多発性硬化症というという難病だったんです。」

多発性硬化症とは脳や脊髄、視神経に病巣ができ、歩行障害や視界不良などの症状が現れるもので、国内に約1万3000人の患者がいるとされる原因不明の難病だ。

こん平さんは、右半身マヒと聴覚障害のほか、歯完道具である歯槽の機能にダメージを受け、さっそく病院でのリハビリが始まったが、



三ノ宮駅でのツーショット。「都電落語会」出演者より、2014年に父の介護費用を46万5000円に削減したと報告した。【取材】

「父はとにかく病院嫌いで、こんなところで寝ている場合じゃない」と、点滴を引き抜いて仕事に行こうとしたこともあって……、入院してしばらくは本当に大変でした。」

翌年5月には退院したものの、言語障害と手足のマヒが残り、咲さんと三女が中心になり自宅でのリハビリが始まった。だが、思うように動かない身体と仕事ができないジレンマとでしだいに数か月も休んで、笑点が始まると「見たくない」と、テレビを消してしまおうようになった。だが、家族は諦めなかった。

「実は父が倒れる6年前（1998年）に母が脳出血で倒れ、その後も糖尿病を患っていて、2歳違いの妹と私が通って介護を続けていたこと

もあって、大変な話、慣れていたんですね。だから、リハビリを続ければ絶対に回復するよ……」

とはいえ、当時謝罪だった咲さんは、生後1か月の長男の育児と介護に追われ、「介護漬けの毎日で、今考えてもあの当時の記憶がスゴウと抜けている感じで……ほかのことを考える余裕なんてありませんでしたわ」

「必死な思いが通じたのだろう、こん平さんは07年には高座に復帰。大好きな卓球も10日以上に上ツリーを譲けられるほどに回復し、咲さんは心身が安定してきた父と一緒に、介護講演会で全国を回るなどの活動を始めた。」

飯を食べるのも薬を飲むのも、すべて自分でできますし、お湯をかけてあげれば体も髪も自分で洗えるようになりました。」

「前白いことを『うわね』と笑うようになったというのだ。」

「おかげさまで退院時の要介護1が3になって、下がることはあるけど上がることはあり得ない、と先生も驚くほどの回復ぶりです。」

つまり、この「都電落語会」が、こん平さんに奇跡をもたらした、というわけである。

とはいえ、10年間の闘病は本人にとっても家族にとっても、毎日が戦いだったはず。ネガティブになる間もあつたことだろうか。

「私は父が『笑点』で一番活躍していた頃に生まれた子供なので、特に元気がいいN/Aを受け難い。特に「元気がいいN/Aを受け難い。特に」と思います（笑）。介護は心配しすぎず、程よい距離感を保つこと。あとに短時間で効率よくこなすのが勝負。介護に正解はありませんが、それが20年近くの間、介護生活で身についた私なりの知恵です。間違いはなかったと思っています。」

だが、咲さんはじめの家族の懸命な思いがこん平さんを元気づけ、こん平さんも必死にその気持ちに答えた。徐々に回復の兆しが見えはじめ、一変して立ち上がり、座った。散髪ですすけ髪を伸ばすようになったんです。」

そんなこん平さんの姿を見て、聞いたのが都電落語会だった。

「父の故郷は新潟ですが、第二の故郷は里郷や大塚など豊島区。そこを走っている唯一の車線が都電なんです。以前、私は都電の中でミュージック・ナビゲーションをしたことがあって、その時、ああ、ここで落語ができたら素敵だなあ、と」

咲さんは14年にイベント会社を設立。そして、「都電落語会」が実現することになった。

「ただ、長時間外に出るのは父々のことなので、父に、本当に大丈夫？と聞くと、やるよー」と」

スタートした昨年8月22日は、10年前にこん平さんが倒れた秋祭りの日だった。

「実はそれからなんです。父が驚異的に回復したのは、9月には自分でトイレに行くようになり、今ではひとりですべてから起きて、リハビリ用の靴を履けるようになった。こ

ところが、2013年4月、71歳になったこん平さんを、さらなる病態が悪化するようになる。それが糖尿病の悪化だった。

「多発性神経症で入院した際の検査で糖尿病があることがわかったんです。血糖値もそれほど高くなかったため、治療するレベルではないといわれていたんです。」

だが、アクシデントが起こった。「糖尿病の患者にとって怖いのが目に見えない傷で、たとえばさっかいた脚から指が入る場合があるんです。父の場合も足の指から指が入ってしまい、それが原因で足の壊死が始まってしまったんです。」

足から入った指はすでに心臓まで達し、それが指に回れば命の危険にさらされる。C.C.I（心疾患集中治療室）に緊急入院したこん平さんに対し、心臓の菌を除去するため、24時間休室での治療が続いた。だが、2013年6月25日、突然心臓停止状態に。

「電気ショックで奇跡的に命をとりとめたのですが、心臓が真滴した原因が足からの細菌感染だったことあり、先生からは「指を切断して命を守りましょう」と……」

結果、壊死した左足の指を3本切

除。だが、数日後医師から告げられたのが「命を守るために膝から下を切断せざるを得ない」という、あまりにも奇麗な宣告だった。

「家族の間では父の命に代えられない、と足を切る方向で話が進んで、すでに手術の日も決まっていたんです。でも、足を切ることにしたら懸命に生きようとしている父の気力さえ失ってしまう……そう思ったら、どうしても同意書にサインができませんでした。」

咲さんはセカンドオピニオンを求めて奔走。結果、ある医師との出会いにより、現状では切断しなくて大丈夫です」という判断が下されることになるのだった。

こん平さんが退院したのは、13年10月のこと。ただ、寝たきりの状態で要介護度は4。咲さんたちきょうだいで役割を決め介護を担うことになった。

「三女が月曜から土曜の昼間を担当。私が月、水、木曜日の夜と日曜の午前中、ほかの時間は長女と長男とで交代で付き添うことになったのですが、日々の調理や入浴の介助に加え、退院の際に車椅子に乗せたりするのは、かなりの重労働でした。」

「そして、咲さんが介護を通して得た経験は、知らず知らずのうちに娘のスキルをアップさせ、会社を立ちあげて「都電落語会」を始め、イベントにチャレンジャーする原動力にもなった。」

「介護は身近で支える人のちこつとした思いと機転でいかようにもなるもの。とにかく自分自身が諦めないことです。諦めなければ、その気持ちは相手に伝わりやすから。」

そう力強く語る咲さん。親子の連携は、まだまだ続きます。

ワンピンズが主役の落語会
TV-BS11555

1.2.3 ちゃっ

Information
都電落語会
2016年の開催日程
3月12日、4月17日、6月22日、6月26日、7月16日、8月22日
●お問い合わせ
電話：03-3945-5746 (ICMプランニング)



中央の奥に10代男子が撮影中、2014年からの本格的な落語が楽しめる